

風土を温める

シリーズ 高山の文化財 ⑨

桐生の庚申さま

江戸時代はこの信仰が最も多彩で盛んな時期であり、各地に庚申堂や庚申塔が建てられました。市内には、桐生町のほかに、国分寺の庚申堂や大隆寺の庚申塔などがあります。



祠正面

市指定の史跡「桐生町万人講」から北へ約二〇〇メートルのところに、秋葉の祠と並んで「庚申堂」があります。

万人講と庚申堂に面した道は、江戸時代の越中街道で、現在の太田町付近から始まり、桐生町を経て富山方面へ続く重要な街道でした。近世

中期の地誌である飛州志には『御猿塚 同村にありて庚申の小祠あり』という記述が残されています。

前面両開き格子戸で入母屋造りの祠は、洪水で流された後、近世末期の天保十四（一八四三）年に再建されたものです。



本尊 青面金剛像

庚申信仰は干支の六十日ごとの庚申の日に行われた信仰行事です。その起源は、中国道教の「三尸説」に求められ、日本に入ってから、仏教やさまざまな民間信仰と複雑にからみあつてきました。

三尸説とは、体内にいる三尸と呼ばれる霊物が庚申の晩に体から抜け出で、その人間の悪事を天の神に告げ、神は悪事の大小に応じて寿命を縮めるといふものです。したがって長生きをするために身を慎みながら庚申の晩は徹夜をし、三尸が体内から抜け出さないようにしたのです。

本尊の石仏は享保十三（一七二八）年、信州伊那郡片倉村の伊藤十良兵衛と伊藤彦之丞の作で、三段の台座の上に載る高さ約一メートルの舟形光背の青面金剛の立像です。もともとは伝尸（＝結核）退治のための本尊で、やがて三尸退治の崇拜の対象にもなつたとされています。外観は三眼六臂（＝三つ目で六本腕）で、合掌姿の憤怒相をしており、手には棒状の武器を持っています。光背には一面に刻まれた雲文様と日輪・月輪があり足元には蓮台を支える二匹の猿の脇に雌雄の鶏が見られます。



蓮台を支える二匹の猿

二猿の庚申塔は、一般によく知られている「三猿」のものより古い様式と考えられています。本来、猿とは無縁であつた庚申信仰が、室町時代末期に山王信仰と結びつき、その神使（＝神の使い）である猿の姿が取り込まれ、やがて『見ざる・聞かざる・言わざる』の三猿に定着するまでの過渡的な姿であるようです。

祠内には、このほかに近世後期の舟形の庚申石塔、剣の絵馬、耳の病の治癒を祈った穴あき小石などがあり、古来より「こうしんさま」として地元の方々を中心に信仰され、大切に守られてきました。

- 〈所有者〉 素玄寺
- 〈管理者〉 桐生町文化財史跡保存会
- 〈所在地〉 桐生町一丁目二三七番地
- 〈時代〉 江戸時代（十八世紀）